

モデル事業名	「伝承芸能の機能を活かした集落の賑わい創生」モデル事業
活動団体名	特定非営利活動法人佐渡芸能伝承機構
ホームページ	
所属/ 担当者名	事務局/松田幸子
連絡先	080-6634-3423 sadomaturi@yahoo.co.jp
活動地域	新潟県佐渡市

●活動地域の概要

- ①総人口の推移 昭和60年81,939人→平成19年65,267人(平成21年12月現在 64,765名)
- ②年齢別人口割合 0～14歳11.6% 15～64歳52.5% 65歳以上35.9%
- ③高齢単身世帯割合 13.07%(全国平均7.88%)
- ④714行政区のうち、115行政区(全体の約16%)が65歳以上の高齢者が半数を超えている。
- ⑤伝承芸能が行われている祭りの数 約120
芸能の伝承団体数 159(一つの祭りに複数の団体がある場合があり総数は祭りの数を超える)



●豊岡集落の例に見る佐渡市の現状

豊岡集落は、30世帯77名(内65歳以上49名、高齢化率63.6%)の集落
 少子高齢化にもかかわらず、祭りを絶やしたくないという思いから、鬼太鼓は伝承され『門付け』が現在も行われている。
 しかしながら写真右の『大獅子』は人で不足の為、舞うことができなくなり、動き・唄の伝承が途絶えてしまった。
 現在では、残っている祭具を持って、各家をまわるだけとなってしまっている。

●活動地域の課題

各地域に残る価値ある伝承芸能が、少子高齢化による人手不足により、活動縮小などを余儀なくされている。その結果、人と人とのつながりも途絶え、集落活動全体が停滞してしまうという悪循環に陥っている。佐渡における『祭』は集落の集大成であり、芸能の稽古を通して世代から世代への芸能の引継ぎ、集落運営のノウハウの継承など様々な面で、コミュニティの維持と活性化に大きく寄与している。

多くの地域が持っている独自の伝承芸能の価値を地域自身が再発見し、集落活動の低下を招く悪循環をいかに断つかが課題となっている。

●活動の内容

①平成20年度

地域では、「困った」「人がいない」という話合で完結しており、「ならばどうする」という議論がされていない。祭りにしても同様であり、自分だけでは解決策を見出せないところまできている。

しかしながら、集落が大切に伝承してきた独自の祭りや芸能は、それが集落の誇りや宝である。自分達のもつ資源を再認識してもらい、誇りを取り戻してもらうため島外の大学生との交流の場をコーディネートし、地域内での話合の場を生み、集落の機能の維持につながるよう交流が継続するように支援することが必要である。

具体的には、祭りの時期を中心として、大学生を集落に受け入れ、伝承芸能の稽古・祭りを通してコミュニティづくりに参加してもらう為の活動を実施するが、それ以前に、集落の課題や問題の調査や要望などを確認するために集落に何度も足を運ぶことを続けた。同時に、受入対象として前向きな大学を訪問し、大学側の要望などの調整を行い、平成20年度に新潟大学と黒根集落との交流が実現した。

②平成21年度

平成20年度の活動を受けて集落に入る大学などと受入集落との円滑な交流をはかる為の活動を継続。

1. 集落外から祭りの時期を中心に対象地域に入りコミュニティづくりに参加する為のコーディネート
2. 集落外から対象地域に入る団体の募集 受入対象となる大学の訪問
3. 佐渡島内の受入集落の募集 集落へ出向いて説明。

● 活動の成果

・平成20年度

- ①受入実績 1校1集落 新潟大学 → 黒根集落
- ②来年度受入予定 2校
- ③受入希望集落 13集落

交流を行った黒根集落は12戸の集落で芸能の担い手は6名ほどしかいない。しかし伝承芸能の門付けを行うには最低でも15～20人は必要で親戚や近隣の手伝いを借りている。いつもは疲れると休憩してしまう手伝いの人も学生の熱心さにつられて最後まで祭りに参加していた。結果祭りはたいへん盛りあがり外からの刺激が活性につながる好例となった。

実際に受入を行った集落はもちろんのこと、受入予定及び希望の集落においても、提案に対して受身ではなく、「受入にあたって自分たちの集落は何ができるのか」などの集落を見つめなおすきっかけとなった。

・平成21年度

集落への大学生の受入実績

- ①豊岡集落と新潟大学教育学部森下ゼミ
- ②羽吉集落とアメリカ、パシフィック大学
- ③高千地区と相模女子大学英米文学科鈴木ゼミ
- ④黒根集落と新潟大学教育学部
- ⑤関集落と新潟大学教育学部

本年度は、20年度の黒根集落の祭りの参加をモデルケースとして、稽古期間を含め、豊岡の祭りへの参加が本格的な交流となった。大獅子復活という目的もあり学生だけでなく周辺地域の住民の手助けもあり、豊岡集落の活気というだけでなく今後、佐渡島内の連携につながる可能性を見出すことができた。メディアにとりあげられたこともあり、佐渡島内や新潟県内に広く周知され新しい連携の形が理解され、今回交流をした集落・大学とも今後も継続した交流を望んでいる。

その他、集落においても他地域から広く人を受入れることにより集落を担う人材の育成にも効果があったと言える。



【黒根の祭りで、門付けの合間に地元の人から笛を習う新潟大学学生】



【パシフィック大学受入にあたっての説明会（羽吉集落）】



【羽吉集落での祭りの様子】

● 今後の課題及び展望

①課題

- ・佐渡の春祭りの時期が、大学の新学期と重なり日程調整が難しい。
- ・芸能の稽古を含めての交流を望んでいるので、滞在費・交通費など金銭面の負担が大きい。
- ・それぞれの集落によって、祭り及び集落運営のやり方などが違い、モデルケースは提示できるがひな形という形では対応できない。形からではなく、集落と協議していく上で活動していくことが大切である。
- また、それによって人が育つので丁寧な対応が必要となってくる。

②展望

- ・本事業においては、大学生を想定して交流を進めているが、今後はそれぞれの集落の実情にあわせて対象をひろげていくことも考えられる。
- ・教育現場においては地域との連携が重要視されており、学生自身が自分達の生まれた地域を見直すきっかけにもつながっており、教育に携わる人にとっても良い学びの場となりうる。
- ・本事業を通して広い視野を持つリーダーが育てば、将来的には多岐にわたる人的交流を図っていくことができる。
- ・上記課題の解決の為に、集落、大学、行政機関などとの連携がますます必要となってくると考えられる。より地域の為となる交流を促進していく為に適切なコーディネート作業を各方面と連携して行っていかなければならない。
- ・本事業を通じて培った人との交流を生かして発展的な活動を継続していくことが求められる。